

近代港が遺した町なみ 【高岡市伏木吉久】

吉久地区は、小矢部川と庄川に挟まれた河口に位置する。かつて吉久には藩の米蔵が置かれ、米の積み出しをした御蔵を中心には発展してきた。その後、裕福な農家などの町人が経営する米蔵(蔵宿)もでき、町なみが形成されていった。用途としては商家と農家を兼ね備えたところがあり面白い。

吉久に軒を連ねる町家は、間口が狭く、奥行が深い。また、土間は表から裏まで続く通り庭形式ではなく、入口にだけ留まっている珍しい形式である。

吉久地区の町なみの特徴は、通りが直線的ではなく、蛇行した道に平入りの町家から並ぶことである。軒の線による水平線が強調され、蛇行した通りは視線を遮りながら変化を繰り返し、坂道にも似た独特の趣を創出している。

現存する吉久の町なみは、幕末から昭和初期にかけて建築されたもので、米商によって繁栄した町の面影を今に伝える。





廻船豪商たちの町なみ 【富山市岩瀬】

東岩瀬町は、神通川河口の東岸に位置する港町で、かつては藩の年貢米の移出港として、また川下りされた飛驒の木材を積み出す基地でもあった。

大坂などから木綿を移入し、また北海道から鰯肥を移入するなど、北前船の交易によって巨大な船主が岩瀬に出現する。その代表的存在が「岩瀬五大家」と呼ばれる豪商たちである。

岩瀬の町なみで屋敷が並ぶ一帯は間口が広く、大規模な建物は格調高く、細部まで念の入った仕上げは県内でも屈指の優れた町なみ景観である。

建物正面は、むくりの付いたこけら葺き庇や、竹製の簾のようなスムシコ（簾虫籠）と呼ばれる独特的の建具が特徴的で、贅を尽くした意匠は豪商たちの繁栄を今に語り継いでいる。

米田家・森家・馬場家などが建ち並ぶ景観は、格子・スムシコ・塀・庭木などが調和し、また屋敷背後になるがそれぞれの土蔵にもすばらしい意匠や錫絵などが多く見られる。





金属工芸の町なみと蔵 【高岡市金屋町】

金屋町は、高岡の中心部の西側を流れる千保川の西沿いに位置する。高岡築城とともに、城下の産業発展のため鋳物職人を集め、特権を与えて開業させたことに始まる。金屋町が城の対岸にあるのは、火災の危険があるためと、川が原料や燃料を運ぶ重要な流通路であったからである。町なみは、狭い道路の両側に家が連なり、通りに面して主屋が建ち、その奥に中庭を挟んで土蔵が配されている。そして土蔵の奥には常に火を使用する鋳物工場が置かれた。土蔵を主屋と工場の間に入れたのは、火災のときの延焼防止のためである。切妻・平入り・中2階建ての家々は屋根勾配がゆるく、前面に板葺き底を付けている。主屋は瓦葺きになったが、もとは板葺き石置き屋根であった。いずれの家も前面には格子戸を入れ、2階正面は梁や束まわりを漆喰壁で塗りこめる伝統的な町なみ景観を守り伝えている。



